

校長室から

校長室だより 第3号
令和3(2021)年5月14日発行
文責 宮城県宮城野高等学校
校長 佐藤 誠



本校は今年で開校して27年目を迎えますが、平成7年4月の開校にあたり、学校所在地である「仙台市宮城野区」にちなみ、また島崎藤村の詩集『若菜集』に収められた「草枕」で「心の宿の宮城野よ 乱れて熱き吾身には 日影も薄く草枯れて 荒れたる野こそうれしけれ」と詠われる「宮城野」を採用して、校名を「宮城野高校」としました。この島崎藤村の詩の一節は、第1回卒業式を迎えた平成10年3月1日を記念し、校門から続く植え込みのグラウンド側に建立された「校碑」に刻まれ残されています。

また同じく開校時、多くの学校が採用している“校舎に校名を貼ること”を選択せず、「校名板」を立てることにしました。その校名板は、職員玄関前の植え込み脇にあります。校名の「宮城県宮城野高等学校」に加えて、「MIYAGINO HIGH SCHOOL, THE PROVENANCE OF INNOVATION」という英文が添えられていて、「宮城野高等学校、新しさはここから生まれる」という意味からも、開校当時の国際化を目指す学校としての意気込みが感じられます。

さらに、あわせて「校木」も制定し「ハナミズキ」を選びました。そこで、今回の「学校花木散歩その3」は、校木である「ハナミズキ」を紹介します。

学校花木散歩 その3 「ハナミズキ」 ～本校の「校木」です～

学校要覧にある「校木」の説明は次のとおりである。

「ハナミズキ(花水木) 清楚で美しい白花・紅花のハナミズキをもって校木とする。この木は、樹高5～12m、春に花が咲き、夏には木陰を作り、秋の紅葉も見ごたえがある。初冬、落葉して実が残ると、その実を啄みに小鳥がやってくる。アメリカ原産。1912年(明治45)、東京市長 尾崎行雄がアメリカに桜を寄贈した返礼として、1915年(大正4)に贈られた国際親善の花であり、世界に開かれた本校の校木としてふさわしい。」

本校は上記に記載の校名版にもあるとおり、開校時、普通科に人文国際コースと理数情報コースを設置して、国際化に対応できる生徒の育成を学校の教育方針の一つに位置づけ、平成17年度入学生までの10年間取り組んできた。校木としてハナミズキを選んだことも、目指す学校の方向性を示すものとして理解できる。

さて、「ハナミズキ」という名前は、歌手の一青窈の歌でもよく知られているが、来歴がはっきりしている花木という点ではある意味有名なものの一つといえる。学校要覧の説明にあるように、尾崎行雄がアメリカのワシントン市へ桜の木を寄贈した返礼として日本にやってきた。そこから、これにちなんでハナミズキの花言葉の一つに「返礼」がある。また、東京の新宿御苑には寄贈当時の原木が残っているそうである。

ハナミズキは、アメリカ東部からメキシコ北東部を原産とするミズキ科の落葉樹で、日本には自生しない。アメリカのバージニア州やノースカロライナ州では州の花にも指定されている。日本に自生し、コケシの材料となるミズキの木よりも花が目立つことから“花のミズキ”でハナミズキとなったそうである。花は本来は白花が基本で、当初はピンク花をベニバナハナミズキと呼んだそうだが、現在ではピンク花の木が主流となっている。

では実際に、学校の校木であるハナミズキがどこに植えられているか、皆さん知っていますか？ さておなじみ「開校当時植栽図面」によれば、校門から校舎に向かう両側の植え込みに沿って、東のグラウンド側に7本、西の駐輪場側に6本、職員駐車場の駐輪場側の植え込みに5本植えられている。現在は、校門からの植え込みは、グラウンド側6本(うち校舎に近い2本が白花で他はピンク花)、駐輪場側にピンク花4本が今も残っている。一方、職員駐車場脇は2本が残るのみである。真ん中に残る低めの木はピンク花だが、校舎に向かう階段の脇にあるハナミズキに特徴がある。背の高いピンク花の木と低めの若い白花の木が、根元の部分でつながっているのだ。根元だと「連理の枝」とは呼ばないのかも知れないが、駐車場から校舎に向かい階段を昇りながら、ピンク花と白花が寄り添うように咲いている様子に、何か不思議な感じがしていた。しかし、残念ながら、既にほぼ花が散って残る花もごくわずかの状態となってしまったので、今の情景を確かめるのは難しいかも知れない。幹が根元でつながっているのは見ることができると思うが、二色の花が咲く様子は忘れなければ来年確認してみてください。

県内の感染が拡大傾向にあった4月半ばの段階で、5月8日(土)開催予定だったPTA・教育振興会・放課後活動後援会の各総会は書面審議とし、あわせて5月13日(木)14日(金)に200名以上の生徒ボランティアの運営により開催予定だった生徒企画体育的行事「体育祭」も、時期を9月末に延期としました。

「重点措置」が延長され、連休中に少し感染者数の報告も減少傾向となった結果、5月7日(金)に政府により宮城県の「まん延防止等重点措置」の解除方針が示され、8日(土)の県対策本部会議で承認されました。その県方針を受け、県教育委員会からも県立学校に対して具体的な対応通知が出されています。

一方、仙台市の郡市長の強い要請を受け、県・仙台市緊急事態宣言は解除せず、引き続き仙台市内の飲食店への時短営業の要請を5月末まで継続する方針が示されています。今後も、必要な感染予防対策をとりながら、学校における教育活動を継続していきたいと考えています。

本校の卒業生が各方面で活躍しています。

4月末に、河北新報朝刊に本校卒業生に関する記事が2本掲載されました。

○4月28日(水)「女子レスラー 利府アピール 町観光大使・藤本さん案内」

○4月28日(水)「東日本大震災10年 未来への歩み日和山題材に 石巻出身の井上さんが立体作品制作 被災地での展示強く望む」

上記のうち、「東日本大震災10年 未来への歩み日和山題材に 石巻出身の井上さんが立体作品制作 被災地での展示強く望む」の記事は、河北新報社の許諾を得て下に掲載しましたのでご覧ください。

さて、最初の「藤本さん」とは、本校5回生で普通科卒業の「藤本つかさ」さんのことで、本校卒業後は東北福祉大学に進学、卒業後、映画出演をきっかけにプロレスラーとしてデビューし、現在まで女優、そして女子プロレス団体アイスリボンの取締役兼選手代表プロレスラーとして活動しています。

次の、下に掲載した記事の「井上さん」は、本校17回生、2014年(平成26)年3月美術科卒業の「井上修志」さんです。記事にあるとおり、井上さんは本校から多摩美術大学に進学、さらに東京藝術大学大学院に進み、その制作活動の中で、故郷の石巻の震災当時の様子を素材に人々に伝える作品の制作を構想するようになったそうです。記事にある作品『日和山の階段を新しい視点まで延長してみる』は、東京藝術大学大学院の修了制作として取り組んだ作品で、完成後は、今年1月29日～2月2日まで「東京藝大卒業・修了作品展」に出品された他、埼玉県の入間市博物館が主催し今年3月11日から4月11日までの1ヶ月間開催された「東日本大震災写真パネル展」で、被災体験を持つ作家の作品として博物館正面入口前に展示されました。新聞の記事によれば、井上さんには、この作品を被災地で展示し多くの人に見てもらいたいという希望があり、展示場所を探しているとのことでした。

この2つの記事が偶然同じ4月28日に掲載されていたので、ぜひ校長室だよりで紹介したいと思っていました。

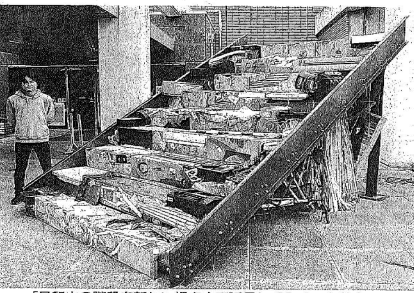
実はこの他にも、活躍しているたくさんの卒業生がいます。3回生に声優の鎌田梢さん(「ふたりはプリキュア」「ONE PIECE」他)、9回生に、女優の稲葉さゆりさん(NHK「篤姫」他)、マンガ家の宮崎ももさん(ペンネームは宮崎夏次系、2013年文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品「変身のニュース」他、『月刊モーニングtwo』連載中)、14回生に、俳優の上遠野太洸さん(「仮面ライダードライブ」「仮面ライダージオウ」でチェイス役他)、フリーアナウンサーの斉藤百香さん(元東北放送、「ウォッチン! みやぎ」「サタデーウォッチン」他)、19回生に俳優の千葉冴太さん(舞台ミュージカル「テニスの王子様」他)等が、ネットでもすぐに検索できる卒業生です。また、美術・デザイン系のアーティスト活動をしている卒業生もたくさんいると思います。

在校生の活躍同様、ぜひ、卒業生の活躍にも注目して欲しいと思います。

2021年(令和3年)4月28日(水曜日)
文化 (10)

未来への歩み 日和山題材に

石巻出身の井上さんが立体作品制作



「日和山の階段を新しい視点まで延長してみる」と井上さん
—埼玉県入間市の市博物館

被災地での展示強く望む

作品は縦長の、奥行きが、海岸から山頂の家は300m、高さの約、階津波で大規模壊れた、階段に降り付けたコンクリートは、津波の被害を受けたよう(井上さん)といふ活かしに傷つき、置き置かれたまま、想起させる建物の部材、電化製品や家具など、散らばる。「日和山」は、復興する現在の街をかんして見られる場所、そこを起す新たなアクションが未来へ続くといふ。

中学の卒業の前日に震災、前のことはいっぱいあった。現実を受け入れられず、震災が起きた。家族は無事だった。

最初は手流され、目の前のことばかりだった。今年1月29日、1月30日、東日本大震災を題材にした「東日本大震災・修了作品展」に出展、会場、埼玉の入間市博物館関係者の目に留まり、11日までの1ヶ月間、同館にあった「震災パネル写真展」に合わせ、正面入り口前に展示された。

井上さんは今春、大学院を修了し、アーティストとして本格的に動いた。日和山の「被災地での展示」を強く望んでいる。「東北の人が被災地をたづねてくる、ささやかなけなげなところ、ほろけいという期待がある。連絡先は井上さん090-40000-40000。」

石巻出身のアーティスト井上修志さん25。東京都足立区が、東日本大震災で被災した体験をベースにした立体作品「日和山の階段を新しい視点まで延長してみる」を制作した。津波から逃れようと、多くの市民が避難した同市の日和山公園にある階段がモチーフ。「多くの被災地の人々に見てもらいたい」と、展示場所を探している。

